

# 本のページ

夕刊よみきり

## 私の書棚

自分の書棚はもっていない。今、後ろにあるのは、『夢屋』を開くときあつめてきた古本。遊びにきた「障害」者や見学に来た人たちが、自由に読んでいくためのものだ。自分の本は学生時代、友人が古本屋を始めるといつので全部やってきた。それ以来、棚に本を並べるということをだんだん

## 宮本 誠一 色や匂い、触感薄まらぬ言葉



映画の上映会や町づくりのパンフレットなどをはり、「皆が集い、くつろげる場にしています」と話す宮本誠一さん

しなくなった。  
それまでは、ご多分にも  
れず、読んだ本がそばにな  
いとなくなると不安で、す  
ぐに読み返せるよう手のと  
どくところに置いたり、と  
きには背表紙を眺め、大し  
たこともない、活字で埋め  
てきた自分の思考の歩みを  
苦々しくも、どこかにつか  
しくふり返ったりしていた  
ものだ。だが、いつのまに  
かそんなことにこだわって  
いる行為自体、うつつとし  
くなつた。  
携帯、インターネット、  
電子メールと情報は多様を  
極めつつあって、本とて同  
じだ。巧みに器だけ装いさ  
れ、中身は流通のスピード  
に影響され始めている。読  
書と書き手の無意識は左右  
され「文学」に限って言え  
ば、その概念さえ早くもこ  
われだしている状況にあ  
る。  
今後、書物がどんな方向  
へいくか、もはや遅すぎる  
問いだ、情報とつなが  
り、見つめる眼差し、日常  
の視点だけは見失わずに  
いたいと思っている。自己  
の生活から照らすことで、  
自ずとそこには色や匂い、  
触感の薄まらぬ言葉の書  
棚はできると考えている  
からだ。棚はスチールや木  
フロップ、魂、なんでも  
かまわない。肝心なのはど  
う消化し、生きる実感を日  
々の中に取り戻していくか、  
だから。  
(障害者作業所「夢屋」代